
父上

拓哉（第2形態）

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

父上

【Nコード】

N4914Z

【作者名】

拓哉（第2形態）

【あらすじ】

山賊と主人公のお話www

(前書き)

これは昔々のお話です。

桐谷恭一郎の生活

拓哉（第2形態）

僕の名前は桐谷恭一郎。

時代は江戸……。

戦乱の世の中である。

僕はこの地（桜ヶ丘）で生まれ、18年間生きてきた。
今、18歳になって思う事は……。

「山賊が下りてきたぞお！隠れるお！」
と、桜ヶ丘の住人が叫んだ。

ここ、桜ヶ丘村は地位的に弱く、貧弱な土地だ。
山賊なんかが攻めてきたら人っ子1人残らないくらいにされてしま
う。

「ガッハツハ、ここが桜ヶ丘か。いい土地じゃねえか。」

山賊のボスっぽい男がそう言った。

村人はみな、隠れている。

みづかりでもしたら……。

「おい財間、あの物陰の影は何だ？」

みづかつてしまった。

この前まで一緒に遊んでいた床屋の秀太郎くんだ。

秀太郎くんは22歳で、立派な学者だ。

「おい、野郎ども、ブツ殺せえ。」

山賊のボスの声が響いた。

「イヒヒヒ、アイアイサー。」

山賊ども（約30人）は一斉に秀太郎君のもとに剣を振りかざして
走った。

（ドッスン、カチカチ）

秀太郎君は持っていたリモコンのボタンを押した。
すると、どこからともなく檻が飛んできた。

そして、あつと言う間にボス以外の山賊を閉じ込めてしまった。

「こんなもんでオレらが捕まると思ったかあ？」

山賊の中でもイカツイ奴が檻を思い切り斬りつけた。

「無駄だぜ。その檻は斬れないよ。」

この人はやつぱ天才だった。

「この檻は鋼鉄できていて、強度においては最強だ。お前らは、もう死んだも同然だ。」

「なんだとおゝ？おい、こんなもん斬つちまえ！」

ボスも混じって檻に剣を振っていた。

それを見て、秀太郎君はもう1つのボタンを押した。

(ドーン、バコバコーン)

村のところどころから大砲が飛んできた。

それらは檻にぶつかって爆発した。

山賊は全員死んだ。

「やったあゝ、山賊を倒したぞ！」

僕は思わず叫んだ。

「待て、恭一郎、あれを見ろ！」

秀一郎くんは僕の後ろを指さしている。

僕は振りかえった。

すると、そこには・・・。

「お前ら、やつぱあめえんだよ。」

そこには、なんと僕の父上が。

「どっ、どういうことですか？父上、どうしたんですか？」

僕は聞いた。

「教えてやろう。おまえの父のオレ様は世界1の山賊だ。最強だ。

お前は弱い。強くなれ。そして、オレ様に会いに来い。それまで待っている。」

僕は何が何だかわからなかった。

父上の背中には大山賊^{フルサイカス}の証が・・・。

「じゃあな、倅よ・・・。」

そういうと、父上は歩いて行った。

「父上、どうして今まで18年間顔を見せなかった・・・。山賊だからか？顔くらい見せるよ。馬鹿野郎。」

父上は返事もすることなく、歩いて行った。

（後書き）

ども、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4914z/>

父上

2011年12月16日19時52分発行